

琉球大学学術リポジトリ

パラオにおける教育の実態とその一考察 — 在留日本人教育者からの聞き取りを中心として —

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部附属教育実践総合センター 公開日: 2011-04-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 加藤, 好一, Katou, Yosikazu メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/19029

パラオにおける教育の実態とその一考察

—在留日本人教育者からの聞き取りを中心として—

加藤 好一

A Study of Republic of Palau education

-An Oral study from Japanese resident teachers in Palau-

Yosikazu KATOU

1 はじめに

2009年9月29日より10月3日まで、私は琉球大学教育学部の里井洋一教授に同行してパラオ共和国を訪れた。同国の小学校教育に関わる日本人教員からの聞き取りを柱に、同国における教育の実態調査を行うためである。(1)

この国でいうパラオ教育とは、パラオ共和国における学校教育という意味の他に、同国の小学校におけるアイデンティティ育成のためのプログラムやその実践内容を指す。そこで本報告においては、現地の呼称にしたがい後者をパラオ科と表記して両者を区分したい。

調査にあたっては、事前の情報を入手した上で、パラオの社会や教育の現状について里井教授との討議を通してまず次のような予測を行った。

《パラオやその教育の現状についての予測》

● 今、パラオの社会にはどんな変化が生じているか・・・1979年に成立した「非核憲法」は、文言は変わっていないものの1993年の住民投票によりその非核条項を自由連合盟約に適用しないことが承認され、自由連合諸国＝アメリカによる核の持ち込みが事実上可能となった。

同国は翌94年にクニオ・ナカムラ大統領のもとで独立したが、非核への賛否をめぐって従来の伝統的共同体の中にひび割れが生じ、それが今日の教育にも影響を及ぼしていることはないか。

● 反面、アメリカとの結びつきがさらに強まったことで同国や関係財団から大きな援助がもたら

され、その影響下で国民の間にアメリカナイズされたドライなライセンス主義が横行し始めているのではないか。(2)

● ならば、学校教育はそれらの動きにどう対応しようとするのか。2006年～2016年までのエデュケーションマスタープランの内容とその現場での実施状況を確認したい。(3)

また、パラオに即した郷土教育カリキュラム・教材づくりは、そのプラン作成とどう連動し、あるいは連動せずにどこまで進行しているのか。(4)

● パラオ共和国におけるこのような教育の現状や課題を調査し、台湾で強調されている本土化教育(台湾化教育)の現状や課題と対比考察すれば、そこから得られた知見を島嶼・沖縄の教育に生かせないであろうか。

台湾もパラオも、自国に強い影響力を与える強国と緊密な経済関係を維持しつつ、だからこそ、その強国に飲み込まれない固有のアイデンティティを育てる教育(パラオ科・本土化教育)が共通して課題となり、その実践化が図られてきた。

一方は東アジアに属し、他方は事実上アメリカ圏に組み込まれているが、母語以外の言語も使いながらパラオ・台湾という地域に即した教育を重視せざるを得ない共通点がある。

では、両者の間にはその地域に根ざした教育の内容やアプローチの方法・学習法などにどんな差異や共通点があるのか。まず台湾・金門島においては仁愛・礼節をベースにした儒魂洋才の教育が、本土化教育を媒介に台湾人としての自覚育成

* 琉球大学教育学部

と結合されようとしている。

例えば清明節とかかわっては、中国古代の劉邦の故事が取り上げられて中国人としての心情・共通知識を身につける一方、自地域の伝統行事を学ぶ学習活動が本土化教育として推進され台湾への帰属感が養われていくのである。(5)

一方「かりそめの独立国」パラオでは、共同体での教育とは切り離されたアメリカ的教育が広がっているが、それと並行してパラオ再発見の教育が模索されている。

ならば、そういう教育は現地パラオの学校において実際にはどう行われ、そこにはどんな成果や課題が生まれているのか。その実態を身近なところで、しかも第三者として把握しているのは、JICA(国際協力機構)の一員としてパラオの教育計画の策定を支援し、各学校において現地の児童を教える日本人教育者に他ならない。

私たちの調査は、その方々に話を聞くところから始まった。

2 パラオ教育省から見る教師と児童の実態

9月30日朝、まずはJICAの事務所に行き、次いでパラオ教育省で算数・数学のカリキュラム編成と現地の学校指導を行う中村時夫氏を訪ねる。(6)

まずお聞きしたのは、この国における小学校教育の現状である。中村氏によればパラオには公立小学校(1年～8年)が16校あり、うち6校はパラオ本島とコロール島以外の島々にある僻地校といってもよい。

子どもは小学校を卒業するとパラオハイスクール(9年～12年)にすすむ。ハイスクールを出るとその97%がパラオ短期大学(PPC)にすすみ、卒業後は毎年数十名がアメリカ軍の兵士となっていく。そのアメリカは、2009年まで毎年多額の資金をパラオに教育支援してきたという。

学校は4学期制、学期末には一斉テストをやるがその数学の問題は中村さんのカウンターパートナーのハドソンさんがつくっている。採点は各校で行うのだが、それがどれだけ正確かはあてにならないようだ。一方、算数・数学のカリキュラム自体はこの09年の2月にできて、8月の新学期か

らそれを使うという。

「指導主事」としてはペリリュウ・カヤンゲル・アンガウルが守備範囲である。それらの小学校にある計40クラスの授業を参観し、指導案に即してアドバイスをを行い教師の研修を支援する。

万国共通の数学だからこそ助言・支援が効果的で、学習レベルの国際比較もできるという。ふりかえって思い当たることが多いのか、苦笑しながら「日本を尺度にするとまちがいだ」と何度も口にしつつ次のような現状を話してくれた。

- 使っているのはアメリカの教科書だが、パラオの子どもに3ケタ÷2ケタの割り算をさせると、1時間かかってもできない子が多い。見ると、さまざまな数字をあてずっぽうで入れて解こうとしている。つまり九九ができないのだ。

- それを教えるべき教師の力量もばらばらで、なかには計算力が怪しい人もいる。そこで、学年を超えフィードバックして九九を復習する教材をこの3月につくり、学習確認週間を設定してパラオの5～8年生全900名を対象に全国一斉テストを実施した。

45題は九九をランダムに出題し、残りの5題は低学年には九九を使った割り算や掛け算を、高学年にはその応用問題を入れる。各校で学年ごとに点数を集計すると、その平均は89点であった。優秀者にはJICAから九九のTシャツをプレゼントした。

ところが、結果を分析すると九九の計算力は8年生ではなく6年生がピークであった。7、8年生では九九を使わなくなるので力が低下するのである。そこで8年生で使うアメリカの教科書を見ると、順列や確率など高校なみの高度な内容が入っていた。

- では、教師の学力はどの程度か。試みに1年～8年までの教科書から122題を出題して解いてもらおうと正答率は42%。特に同位角・錯角・表面積などの図形領域が弱い。

小規模校には算数・数学の専科制をとる学校も多いのでこれではまずい。そこで、8～10時間程度のワークショップを開いて教師への補講を行った。やってみると校長以下みな出てきて、「めんどくさい」「さびてる」「おもしろくない」(日本語が

そのままパラオ語化)といいながらもやっている。その後同一問題でテストすると、正答率は76%にまで上昇した。

●では、なぜ教師の数学の力にばらつきがあるのか。実はパラオには教育実習や現職研修の公的プログラムがない。それを指導できる教師も現場にはいない。パラオハイスクールで数学を教えているのはフィリピン人の教師である。そのハイスクールを卒業すれば、十分な学力がなくとも面接や簡単なペーパーテストだけで教師になれる。そのため、人がいないと校長の奥さんとか知り合いの人が教師になることもある。

教師となった後は、自分で70ドルを出してパラオ短大の講習を受けて教科教育の資格を取るシステムだ。そこでその講習を参観してみると、確かに数学の勉強はするのだが、何をどう教えるかという教科教育の視点がない。「内容を伝える」ということが彼らの考える「学習」であって、授業づくりや学級経営などは視野の外にある。

生徒についていえば落第制度はあるのだが、その基準もいい加減なため、ある学校で落第しても他の学校へ転校すれば上級学年に進学できてしまう。だから学校には他校の制服を着ている生徒がいたり、同一学年に異年齢の生徒がいる場合もある。彼らの学力は保証の限りではない。

●確かにカリキュラムやプログラムはつくられ改善されているが、こういう現場の実態ではそれらがどれだけ活用され実体化されているか、いささかも安心できない。だいいち、まだ英語がよく分からない2年生にアメリカの厚い教科書が配られるのだから、そこにいくら立派なカリキュラムがあっても絵に描いた餅である。実際には、JICAの人たちがパラオ語で説明できるワークブックを使って教えている。

すると、これまでのパラオ語にはない科学的・数学的概念については、それを新しく造語するか、英語を外来語として借用していくかなどの課題も新たに生まれてくる。一方、算数などを母親から母語で教わって力をつける子どももいる。

●このように学校現場や教師養成があいまいなのは、パラオ人がのんびりしていてファジーであることとも関係しているのではないか。そのパラオ人約15000人に対し、外国人・外人人はお

よそ5000人という比率である。

●野菜は他から運んでくるので、ピーマンひとつ1ドルなどととても高い。野菜不足の中、イモ・魚・チキン・ライスに偏った食事をしているように思われてならない。パラオの教育は、以上のような社会環境の中で行われていることを考察の前提として理解したい。

こうして、中村氏の話は終わった。英語とパラオ語による教育のギャップ・パラオ人教師の算数学力の現状とその低下の原因・児童生徒の学力のばらつき・教員育成制度の不備、それらの結果として、作成・配布されたカリキュラムと現実の学校教育の間に無視できない落差が生じていることが彼の話から分かってきた。

つまり、カリキュラムの内容だけをいくら机上で論じても、学校現場での実際の活用状況や各地域の子ども・教師の実態を知らなければその考察は実態と乖離してしまうのである。

そこでその日9月30日の夕方には、現在コロール小学校に勤務している安藤洋子先生・宇田川朋子先生から学校の現状について話を聞くこととなった。

3 「都市部」の大規模校・コロール小の実態

コロール小学校は、いわゆる「都市部」にあるパラオの大規模校である。金網の張られたアーチ形の校門をくぐると、右手には屋根のついたバスケットコート、正面の広い緑の芝生の上には三群の平屋の校舎・カフェテリアが並び、渡り廊下でつながっている。

ここには、パラオ人だけでなく外来フィリピン人の児童も通う。低学年ではまだ英語が理解できないので、英語の教科書の内容を教師がパラオ語に置き換えて授業するのだという。この点は、中村氏の指摘の通りであった。

といっても、教師たちはその内容を座学で「伝える」だけで、「教える」までには至っていない。「問いかける」という活動がなく、いわゆる教授法や学習法はまだアメリカからも入っていない。したがって学習目標は「暗記してテストで点を取ること」に集約される。

せっかくつくられたカリキュラムも現場には十分浸透せず、二人の先生もそれを学校で見たことはないそうだ。作成は上だけで行われている仕事で、現場教師も親も「知らない・持ち込まれない・関心がない」状態であると語る。学校でのスタッフミーティング(職員会議)も校長が出した方針についての質疑が中心であり、カリキュラム問題が取り上げられることはないという。

「足し算できない子がいるからあと一カ月やろう」「カリキュラム上それでうまくいくの?」「そんなもの、どこにあるか知らないわ」・・・安藤先生の談である。最後の学力テストの採点も適当にやり過ぎているのだから、その達成度もきちんと測定できていない。

学力差のある子どもたちを対象に、カリキュラムなどはとくに意識せずにアメリカの教科書を使って表面的な伝達ですませ、あいまいな基準でその達成度を評価する。パラオの規模のコロール小においてさえ、実態⇒計画⇒学習⇒評価⇒改善というサイクルはまだ確立されていないのであった。

パラオ科についても、意識して学習している様子は無い。たしかに低学年では、「パラオを知ろう」ということで地元の音楽・ダンス・ココナツ編みなどを授業に取り入れている。不足するゲストティーチャーを地方から呼ぶ努力もしている。

だが、それはパラオ科のカリキュラムに即してそうしているというより、その場その場の関係の中で行われているというのが正直なところだ。もちろん学年がすすめばパラオの歴史や自然について学ぶ。子どもたちは自分の国や州に誇りを持ち、愛郷心も強いのは事実であるが、それが郷土教育の成果とは即断できない。

一方、子どものおばあさんたちは算術・そろばんなどの日本式教育で鍛え上げられた世代であるだけに、今の教育に大きなギャップを感じている。授業は、全教科が毎日1時間あるが、理解度は怪しい。ある学年では86人中6人が落第生だが、その判定基準もあいまいで、しかも2年留年すると上に進級できるシステムである。卒業イコールふさわしい学力の達成とはなっていない。

一人の先生が長年同一学年を教える。そのためか、教師集団の間では情報交換がなく、またそうい

うことを嫌がる。自分のつくった教材は自分だけで使い、互いに分かちあう発想をもっていない。安藤先生がTTで入ると、「ヨーコが来てくれたのなら私は採点するわ」と言ってその先生は教室を出て行ってしまったそうだ。

研究授業の習慣もなく、見られることイコール評価されること・さらしものにされることと考えているふしがある。コロール小では夏に一回研修会を開くが、その内容はベック(太平洋地域の教育協議会)で報告された内容をもう一度プレゼンテーションしてグループ討議するというものだ。(7) それでも、他校に比べては進んでいる方だという。

自分たちが日本の授業法を示すと、共感するパラオ人教師はいる。授業改善の必要は感じているがその方法が分からない教師は、自分たち日本人教師の提示する方法に関心を示す。そこで一年生のワークブックをつくって現場に持ち込み、その活用法をパラオ人教師と共に考えあい意識を高めて、そこから次の担い手を育てようと考えている。今はそういう共同を通して日々の授業の向上に取り組むことが仕事の中心である。カリキュラムに沿った指導やその実質化などはまだ視野の外にあるとのことであった。

都会的な「貧困」や「格差」は確かにある。コロール小学校では給食費+9ドルをはじめに集めて学年のスタートを切るが、家庭の事情などでそれが払えず入学してこない子もいる。共同体の中で育つため日本に比べて生活力のある子が多いが、一方その共同体が崩れつつあるのも現実で、アメリカ式生活の普及・ゲームへの没頭などの現象も目につく。

ただ学校行事にはたくさんの保護者が集まり、食べ物などの差し入れもある。ウンドウカイはとても盛んで、親の方が競技に熱中してしまうありさまだ。(8)

こうして、大規模校・「都市部」の学校の実態を知ることができた。そこでは共同体崩壊や「貧困」「格差」の兆しがあり、ゲーム等も子どもの生活に浸透しているが、まだそれに流されない環境もある。しかし、教師たちは学習法や教材を共同開発することに関心が薄く、作成されたカリキュラムも

十分活用されていない。

では、地方の小規模校の実情はどうか。これについてはやはり中村氏の紹介で、2002年12月から04年12月までペリリュウ島・ペリリュウ小学校に勤務されていた梅本雅枝さんの話を聞くことができた。

梅本さんはその後いったん日本に帰ったが、今は再びパラオに戻りコロールの日本風居酒屋“夢”で働いている。10月1日夜、私たちはその店を訪ね、彼女の仕事の合間を縫って次のような話を聞いた。

4 離島の小規模校・ペリリュウ小の実態

ペリリュウ島は土が悪いのでタロイモはできるが野菜はあまり育たない。そのペリリュウまでは、コロール島から定期船で3時間ほどかかる。快速船だとフルスピードを出せば1時間で行くが、チャーターすると往復で300~400ドルもかかってしまう。それでなくとも航海に危険な海域であるため、海が荒れるともちろん船は出ない。

島にはハイスクールがないので、小学校を卒業した子どもたちは船でコロールのハイスクールへ通う。水曜=ペリリュウからコロールへ・金曜=コロールからペリリュウへ・日曜=ペリリュウからコロールへ・月曜=コロールからペリリュウへ…往來はシャトルのように頻繁である。

一方、地元のペリリュウ小学校の児童数は100人ほどだ。そのため、複式ではなく学年ごとに授業ができる。しかし、食堂に詰めれば全員が収まるため、雨天時の集会・卒業式などはそこで開く。給食は調理員が3人でつくり、ご飯に加えて野菜炒め・チキン・魚などの一品が付く。魚は、たくさんとれると住民が寄付してくれる。

生徒たちの日常語はもちろんパラオ語である。英語は3年生ではまだあいまいで、4年生からは使えるようになる。低学年のうちはシャイであるが、高学年になるとリーダーとして働く機会も増える。雨のためにウンドウカイが室内の音楽集會に変わると、子どもも大人もパッと切り替えて進行やあいさつなども臨機応変にやってしまう。

その子どもたちは、毎朝「くまで」(パラオ語化)を使って家の前をはき、水くみ・米とぎなどの仕事をすませてから登校してくる。けじめはあるが

皆おおらかで、大切にしているビー玉でも「いいね」と誰かが言えばさっとあげてしまう。もらったお菓子はみんなで分けあって食べる。

ふだんから異年齢集団で遊んでいるためか、面倒見がよい。小さい子を見ると、「かわいい」「抱かせてくれ」と寄ってくる。障害児に対しても分けへだてはない。ケンカやいざかいはあるが、日本のような“いじめ”はみられない。

島には年長者・年寄りを大切にする風潮があり、「うちのおばあちゃん、九九がじょうずだよ」と孫が誇らしげに語る。そのおばあさんに聞くと、自分が教わった昔の日本人教師の名前がスラスラと出てくる。

このパラオ人教師が子どもにいちばん強調しているのは「先生を尊敬し、尊重しなさい」ということで、このような土壌もあるためか、その教えがよく浸透している。「都会」のコロール小では学校に売店があり、おやつを休み時間に食べているし、朝食を食べさせずに「学校で食べなさい」と言う親もある。校庭にお菓子の袋が落ちていることもある。

ハイスクールでは、授業中に食べている生徒もあるそうだが、ここペリリュウでは誰かがお菓子など持ってくれば、「先生へ、おやつ持ってきた人がいる~!!」と顔色を変えて大騒ぎだ。

朝夕の国旗の掲揚・降納の際にピーっと笛が鳴ると、居あわせた子どもたちはその瞬間に全員静止し、その場で直立不動の姿勢をとる。これもコロール小では見かけない光景だ。

パラオ科についていえば、母親や先生がパラオのダンスを教えて発表の機会をつくったりしている。高学年になると、戦争のことをネットで調べたり祖母たちの話を聞いたり、関係する模型づくりを行ったりしているが、特に定まったカリキュラムはない。

誰が先生になるのかといえば、教員免許がどうのなどということとはあまり関係ない。ちょっと教育を受けた人がいて「あの人がいいんじゃないの」ということになれば、校長が頼んで先生になってもらい、やれることからやってもらう。

はじめは高学年の一教科だけを教え、夏休みの研修などに参加しながら次第にレポーターを増

やしていく。それでもできない教科があれば、他の教師が代わって行く。

自分も赴任した当初は低学年の体育と全学年の音楽を受け持ち、次に低学年の算数を教えるようになった。その新来の自分をベリリユーの人たちは家族同然に扱ってくれた。日本からわざわざ教えに来てくれたとの思いがあるのだろうか。道を通ると、どの家からも「寄っていけ。食べていけ」と声がかかる。8キロも太ってしまうと、「これでおそろいね」と笑われてしまった。

ホストマザーやホストファーザーも、自分をいろいろな所に連れて行ってくれた。島にはテレビがないので、夜になると人々はサマーハウスという屋根のない集会所に集まり、みなでおしゃべりする。美空ひばりの歌が好きな人もいるし、パラオ語で演歌「大阪しぐれ」を歌ったり踊ったりする人もいた。子どもたちは、自然に恵まれたこのような環境の中で豊かに育っている。

このベリリユー島は太平洋戦争において日米の激しい戦闘があったところなので、日本人墓地があり、慰霊団もよく訪れる。今は大切な観光資源となっている墓地やベリリユー神社などは、現地の人々がすすんで草刈りをしている。

音楽の授業で「ふるさと」などの日本の唱歌を教えると、それを聞いて喜んだのはこの慰霊団の人たちと昔その歌を歌ったパラオ人のおばあさんたちであった。伴奏の鍵盤ハーモニカやリコーダーは日本から寄付してもらったものを使う。なかには家に持ち帰って練習したり、家族で楽しむ子どももいた。

ベリリユーでの教師体験といえば、以上のようなことが懐かしく思い出される。自分ももう一度パラオに戻りたいと思った理由は、これまで話したような素晴らしいベリリユーの人々と出会ったためであろう。ここは本当に良いところだ。パラオ語がもっときちんと話せれば、ずっとここで教師をやっていたかったのだが……

以上が、梅本さんのお話であった。ゲームに没頭する「都市部」の子どもに対し、テレビもない共同体の中で育つ「離島」の子どもの特色がよく分かる。教育上の共通点は学校教育、中でもパラオ科はそのカリキュラムを特に意識して実践されていないことである。

また、教師の育成にはまだきちんとしたシステムがないこと、パラオ語から英語への接続は多かれ少なかれやはり学習に障害をもたらしているということも一致していた。

5 JICA (国際協力機構) の取り組み

では、その教育支援にあたるJICA(国際協力機構)の責任者は、パラオの教育や学校の現状をどうとらえているのか。10月2日には、JICAパラオ支所長・武市直己さんから次のような話を聞くことができた。

- パラオに関するJICAの取り組みの詳細・全体像については、その報告書が日本にある『地球広場』で公開されている。(9)それを参照されるとよい。

- 「パラオ科学習をすすめる」ことにしほって言えば、まだパラオ語自体の表記・つづりがあまいで、文章語として基準となるべきものが定着していない。今は、パラオ語の保存委員会的なところでその統一について話し合っている段階である。したがって、きちんとしたパラオ語の教授体系をつくるまでにも至っていない。そのため、パラオ共通語での共通カリキュラムに基づく統一したパラオ郷土教育も、まだできていない。

ただ、文化省が作成した『History of PALAU』1997は、私立の学校でピックアップしながら教科書として使われている。

- 一方、現在のアメリカによる援助はパラオ側の依存体質を強めさせるもので、「モノをつくらせないで外から与える」傾向がある。今ある体系的教育プログラムもアメリカ側の支援でつくったものだが、その指導のノウハウまでは書かれておらず現場ではあまり使われていない。

さらに広げていえば、この国では今に至るもそのアメリカの教育システムさえ十分消化しきれていない。いや、そもそも、そのシステム自体がパラオに適しているかどうか……

- それに対してJICAは「人づくり国づくり」をスローガンに、現地の人を育てながら活動するよう努めている。教育面では、現場に生きる具体的教材づくりから始めている。また、小1・小2用の教科書も実態に合わせて独自に編さんしている。「与え、依存させる」アメリカ側の支援との違いで

あるが、かといって、パラオの内政にまで立ち入ることはない。いちばんかんじんなのは、パラオの当局者自身が JICA の活動にどう対応してそれをどのように活用するかということだ。

それらの点に配慮しながら、今後も支援を継続していきたいと考えている。

以上が、武市さんのお話の概要であった。アメリカ側の支援による教育カリキュラムは、かたちは整っていても実際には十分機能していないことがここでも指摘された。それは現場で日本人教師たちが感じたことと一致しているが、さらに詳細にその実態を調べる必要がある。

また、その活用の前提としてはカリキュラム作成段階からのパラオ人現場教師の参画が必要であろうが、現状では、それ以前の教材研究・授業法開発支援自体が行われはじめたばかりである。

また、各地の子どもたちが話している「パラオ語」も文章語としてはまだ共通語の段階には到達しておらず、それによるパラオ郷土教育統一カリキュラムもまだ十分なものが作成されていないことも判明した。

6 現地の学校を訪ねて

私たちは、パラオの日本人教育者からこのような話を聞くことと並行して、現地の学校を10月1日・2日に視察した。連休が続いて学校は休みだが、各校の施設の規模や立地の違い、パラオという国の状況や地理をこの目で確かめ記録にとどめておきたい。

1日にはバベルダオブ島の高台から集落に下って、まず海沿いのNGI WAL 小学校を訪問する。道に面した方形の校庭は一面緑の芝で柵などはない。その奥にある平屋建ての校舎はブルーとホワイトのツートンカラーで、すぐ後ろに熱帯の森を背負っている。一方、校庭から反対側に道を渡れば、すぐヤシの木が並ぶ白砂のビーチである。

正面奥の校舎に向かって右は職員室などの管理棟、左にプールや食堂などの施設。それらが校庭を開んでコの字型に建てられ、南国の海に面しているというのがその配置である。

4年生の教室を外からそっと覗くと、パラオ教育省作成の『ティーチャーズレコードブック』が

教卓に置いてあるのが印象的であった。

次は「抜け道」を通して、やはり海近くに建つガラード小学校に向かう。日本風の校門が残っているので注意深く周囲を見ると、人の背丈よりやや低いコンクリート製の半円形の記念物が校門の左手にある。その左右の側面には漢字が刻まれ、「高松宮殿下御来島記念 昭和三年九月」「御大禮記念」とはっきり読める。

昭和三年といえば、1928年のことだ。この時代にはまだ日本人小学校は開かれていない。しかし島民向けの公学校について調べると、「ガラード1926年設置」と記してある。ならば、その跡地を利用して1947年に開かれたのがこのガラード小学校であったと考えられる。(10)

さらに校地を見ていくと、国旗掲揚台や奉安殿跡と思われる土台も残る。翌2日に再訪すると、学校の隣の家から青年が出てきて「今の学校は昔の日本学校の礎石の上に建てられた」と教え、「日本時代のものはあちらにもある。こちらにも」と家の裏手まで案内してくれた。

教室内の児童の机は、日本のようにすべて前面の黒板に向かって並べてある。各教室のドアに貼られた児童名簿を読むと、日本名の子どもが各クラス必ず数名はいる。これは他のいくつかの小学校にも共通することであった。

これに対して、山間部に建つ複式の小規模校がイボバン小学校だ。ここも2日間にわたって調査する。視察する私たちを「視察」しに来た校長先生の話では、教室数は5つでその年度の児童数に応じて入る学年を調整するそうだ。現在の配置は、下の図のようになっている。(今年度は2年生の在籍がない)

Special (4年生)	5年生	6年生	1・3年	7・8年
------------------	-----	-----	------	------

窓越しに教室を覗くと、5年生では児童の机が前面の黒板に向かって前列2つ後列1つの「」型に配置されている。道を隔てた反対側には、職員棟やせまい赤土のグラウンドがある。この校長先生は今の教育大臣の弟だそうで、私たちの視察の意図が分かるるといねいに説明してくださった。他にも山間部の中規模校・住宅地の中規模校(ア

イライ小学校)の二つの学校を視察する。どの学校も例外なく平屋建てであり、複式学級はイボバン小以外には見られなかった。

こうして山間部や海岸、複式から大規模校まで学校間のさまざまな違いが分かると、パラオとしての共通部分と地域としての固有部分をどう融合して、それぞれの実態に応じてどこまでふみこんだ郷土教育カリキュラムをつくるか、その難しさに思い至った。

7 パラオの教育の現状や課題

では、そのことをふくめたパラオの教育状況や課題を、これまでの調査・聞き取りをふまえてどうとらえたらよいか。里井教授と討議した結果は、次のようなものであった。

《パラオの教育の現状や課題をどうとらえるか》

- 今、パラオはその教育もふくめて“北マリアナ化”(アメリカへの同化)しつつあるのではないか。以前訪れたときに少しは感じた“独立”への気概があまりうかがえない。相手にはつくらず、つくったものを与えて依存性を助長していくのがアメリカ側の援助のやり方だというが、それが着実に成功しつつあるのではないか。

10月1日の独立記念パレードに米軍の若い兵士が軍服を着て登場すると、大きな歓声があがる。パラオ青年のアイデンティティはすでに「アメリカ」だ。そういう点は予測通りであった。

- しかし、アメリカの財団の支援でつくったパラオ社会科カリキュラム自体はすばらしい。活動内容や学習の方法も細かく記され、対応する実物教材までセットされている。問題は、それが現場で十分消化されているかどうかということだ。

もし不十分な点があれば現地の人々によって深く吟味・検討され、その良い点を現場でさらに実体化していくような取り組みが必要だ。そのためには日本人教師が現場の学校ですすめている地道な共同授業づくりを今後も継続したい。また、それに対応するカリキュラム活用研修が教育省において今後すすめられるべきではないか。

- では、「すばらしいカリキュラム」という場合、何を指して「すばらしい」というのか。どんなに内容が詳細であっても、それは紙の上のことだ。実践

化されなければ「すばらしい」とはいえない。現場で歓迎され、生きて働くカリキュラムこそがすばらしい。

それには、現場教師の参画が最低条件だ。たとえ稚拙ではあっても、彼ら自身が下から編成していく運動過程こそが重要だ。そのことを通してパラオ人教師が授業づくりへのまなざしを深め、カリキュラムの実践・改訂の担い手となっていくようにしたい。今行われている日本人教師との共同の中で、彼らは少しずつ成長しその力を身につけつつある。

- 「下から」つくりさえすればそれでよいのか。JICAがパラオの教師と共につくろうとしている教材やカリキュラム・授業は、点数化・序列化という狭い“学力向上”のわくの中にとどまてはいないか。それを越えた子どもの発達という視点はあるのか。

いくら現場教師が参画しても、その視点やねらいが教科の本質や子どもの実態からずれていけば「すばらしい」とはいえない。その点もふくめて、パラオ社会科カリキュラムをめぐる現状や今後の活用方法を多面的に検討する必要がある。

- パラオ科について話をすすめれば、パラオ文化を教える授業は各校で行われ子どもの活動も保証されていることが分かった。だが、それはそれぞれの教師と児童の間で自然なかたちで行うことが中心ではないだろうか。

今後は各校・各教師の優れた試みを数多く集成・改善して、共通部分をふまえた個性的な郷土教育カリキュラムを実践事例集として共同作成することが大切だ。パラオ語の表記の統一は、その作業と並行してすすめるべきではないだろうか。

- 祖父母や共同体の中に残っている日本教育は、今の子供たちにどのような影響を与えているのか。取材の中で多少分かってはきたが、それは断片的なものにすぎない。なぜ今日に残ったのか。残ったものをどう生かせるのか。さらに調査や研究が必要ではないか。

また、日本による南洋委任統治・教育・文化移入は大正期に始まったが、それは台湾・朝鮮・カラフトなどの植民地統治とどのような相違や共通点があったのか。日本は南洋の統治に何を求めていたのか。その中で教育はどのように行われ、どん

な「成果」や課題を今日に残したのか。その概要をさまざまな先行研究で確認したい。

聞き取りや視察をふまえてこのような論議をすることで、いくつかの重要な論点か明らかにされた。カリキュラムに内在すべき学力観、カリキュラム作成と現場教師との関わり、その実践にあたる教師養成の課題、「都市部」と離島の教育環境の違いとその活かし方、パラオ郷土教育の発展方向、日本教育の遺産活用の可能性などの問題は、今後も深く検討すべきであろう。さらにふみこんだ実態調査も必要となる。

では、そのほかに考えるべきパラオの教育課題とは何か。その示唆を与えてくれたのが、パラオ日本語補習学校への訪問であった。

8 「もう一つの課題」を見通して

在留日本人教育ボランティアの方々が、私立学校の1教室を借りて13人の子弟を教えているのがこの補習学校である。校長先生の仕事は観光業、教頭先生は廃棄物処理が本業である。

先日お話を聞いたコロール小の安藤先生・宇田川先生も参加しておられる。保護者が教師となり、教師もまた休日返上でその保護者に協力する情熱が、それぞれの姿から感じられる。テラスで中学生3名の実験を指導している土田さんはJICAの隊員で、パラオハイスクールの教師でもあった。

教室では、1年生から5年生までが担当の教師と1:1や3:1のグループをつくり、楽しそうに個別学習している。「教師」は日本語でコミュニケーションをとり、心を開かせながら対応している。国算中心に1日3時間、年間40日程度開校するそうだ。45分の授業・15分の休み時間は振鈴で知らせる。11時に終了した後は掃除もある。

休み時間にはコマ回し、日本の漫画、日本のおもちゃなどで屈託なく遊んで日本文化にふれあう。教師はそこにさりげなく関わり、いっしょに羽根つきをしたりコマの回し方を伝授する。

宿題は週2回程度プリントが出される。算数の力がついて、パラオの学校でも力を発揮する子どももいるようだ。まだ「入学」していない日本人の子弟も何人かいるが、来れば勉強ができるようになることを何とか多くの子に理解させたいという。

「あの子の両親は実は・・・」「この子の進路は・・・」と、ここにも姿を見せた中村時夫氏は実によく一人一人を把握している。フィリピン人の母やパラオ人の父を持つ子もいる。帰って日本の学校に復帰する子もいれば、アメリカに行く子やパラオに残留する子もいる。

彼らを多くの日本文化にふれさせ、その上で「日本の中高一貫校にもどる」「パラオに生きる」などそれぞれの目標と日本語理解力の実態に応じた対応カリキュラムを実践する。

「みんなの目標」には、「おとうさんにかつてもらったかんじトレーニングとかん字マスターをがんばる」などと、各自の2学期の目標が書いてある。学校教育目標は、①自ら考える子ども・②思いやりのある子ども・③粘り強い子どもの3つである。

これらを貼ったボードや展示シートは、係の当番表とともに前面に置かれて教室を飾る。日本語の図書も、自作のボックス2つに入れられてその都度運び込まれる。入口にある『パラオ日本人補習学校』という木製の看板も取り外し式だ。現状を変更しないよう気を配りながらも、教室環境はきちんと整えようというのだ。ここに、日本本土にはないもう一つの小規模校・へき地教育の姿がある。

だが、このような教育を必要とするのは日本人だけであろうか。いや、パラオ人15000人に対して外国人・外来人5000人という現状を見れば、彼らのアイデンティティを尊重する教育が保障されつつ、なおかつその彼らをふくみこんだパラオ共和国の教育計画がつくられる必要がある。

その社会科カリキュラムやパラオ科学習が、パラオの地域に根ざすがゆえに外国人子弟にも共有できる普遍性を有するものとなれば理想的である。そのようなカリキュラムの作成や実践は、この日本においてもいまだ不十分である。

それらの課題を再認識した上で、パラオでの教育の現状や課題を日本人教員からの聞き取りと対比して考察する作業をひとまず終了したい。

09年10月3日夕刻6:30過ぎ、私たちを乗せた中華航空機がパラオ空港を離陸すると、暗闇の中に点在する島の灯りはみるみる小さくなって視界から消え去っていった。

〈注〉

1)パラオ共和国—488平方km(屋久島とほぼ同じ)人

口20397人(2009年 世界銀行) 民族はミクロネシア系 首都マルキョク (2010年11月現在 外務省HP)

2) パラオ教育省に勤める中村時夫氏も、そのことを裏づけるようにこう語る。

「准学士の資格を取る⇒教員となる(ライセンスさえあれば、はじめから1人前扱い)⇒その後は自分が個人として大学での講習などを通じて自己研修⇒ついていけない教員はドロップアウトすることなどはその一例である。

一方、生徒も年度末のペーパーテストで合格・落第を判定⇒ついていけないものは教師と同様ドロップアウトしていく。ストレスなどから家庭内暴力も増えているが、共同体の力が減退しているため、それを十分に防止できていない面がある。」

3) Minister of Education・Republic of Palau 『Education Master Plan 2006~2016』2006

4) パラオ教育省によれば、カリキュラムの改訂作業はアメリカの援助が始まり、2009年7月からは小学2年の教科書づくりに取りかかっている。

5) 同じく09年9月27日・28日における台湾・金門縣賢安国民小学訪問調査に基づく。金門縣教育局『97学年度教育實習機構意願調査審核彙整表一国民小学』によれば、同校は分校をふくめて12クラスであり、日本でいえば中規模校に相当する。

6) 中村時夫氏は、定年で千葉県の前校長を辞めた後にJ

ICAによる海外での教育支援を志した。パラオでは指導主事の役割を果たしながらに教育省で算数・数学の指導に当たっている。2008年3月に赴任し、2年後の2010年春には帰国する。(本人の談) 突然の訪問にも快く対応して下さり、教育大臣室のソファで詳しくお話を聞くことができた。

7) Pacific Education Conferenceが正式名称である。

8) ウンドウカイは日本の委任統治領時代に行われた運動会が現地に根付いたものであり、パラオでは現在も学校行事として盛んに行われている。

9) JICA『地球ひろば』-東京都渋谷区広尾4-2-1に開設 開発途上国の人々への共感や連帯感を育む場、国際協力に関わる市民団体の情報発信や交流、研修の場となることをめざし、「市民参加による国際協力の拠点」として設立された。

10) フリー百科事典 Wikipedia「南洋序の教育」による。JICAパラオ支所長・武市直己さんは、戦前の日本教育の意義を現在と関わって次のように語った。

「アメリカより以前に、このパラオにはじめて「文化」導入を行ったのはこの国か。それはかつてここを委任統治した日本であり、生活・文化に関して現在も年配者の間に強い影響が残る。その遺産を生かすなら、今しかない。暴力支配や差別もあったかもしれないが、歳月がそれを浄化している。」